
徳川日本・ロシア・アイヌ交流史と本多利明の開発経済論(1)
—— 天明6年(1786)成立最上徳内書簡
『乍恐以書付奉申上候』冒頭部を中心として ——

*Northeastern Development Policy in Tokugawa Period (1):
A Study of Mogami Tokunai and Honda Toshiaki*

宮田 純
Jun Miyata

Abstract:

Honda Toshiaki (1743-1821) is a well-known wasan scholar of the Edo period, who also excelled in astronomy, geography, navigational technology, and economic development.

In this study, attempts are made to analyze the influence of Mogami Tokunai (1755-1836) on Honda's northeastern development policy.

Mogami, a Honda disciple, went on an exploratory trip to Hokkaido and the Kuril Islands in 1785-86, and written a comprehensive observation report on endemic folkways of Ainu, and most importantly, the notable presence of the Russians in the area. This observation was ultimately presented to the shogunal officer in Iturup.

Mogami wrote that Russians appeared in Iturup Island before 1785, contacted the Ainu there, and voiced a strong wish to negotiate with the Tokugawa government. Mogami's teacher Honda read this report in Edo before 1788, and authored a book about development policy in 1795 based on Mogami's survey.

In this book titled 'Shizen-chido-no-ben', Honda insisted that Tokugawa shogunate should control the islands of Urup, Iturup, Kunashir, and Sakhalin as traditional Japanese territory. A considerable influence of Mogami's observation report is identifiable in this Honda's book.

Keywords: Honda Toshiaki, Mogami Tokunai, Shizen-Chido- no-ben, Northeastern development policy.

キーワード: 本多利明 最上徳内 『自然治道之弁』 北方開発論

はじめに

徳川時代後期の算学者^{*1}として知られる本多利明〈寛保3年（1743）－文政3年（1821）〉^{*2}は天明～寛政期における時勢的課題への処方箋として、和・漢・洋の天文学・航海術等の知識を融合させた開発経済論を提起した人物であり、その経済思想は『自然治道之弁』〈寛政7年（1795）成立〉、『経世秘策』〈寛政10年（1798）成立〉、『西域物語』〈同年成立〉、『経済放言』〈享和1年（1801）以降成立〉等の著作から看取しうる。本稿の論旨展開の前提として、これらの成果における利明の主張を概説として紹介するならば次のようになるだろう。

天明～寛政期は、徳川社会の変質を促す転換点に位置し、国内においては、商品流通経済の発展や貨幣経済の進展による経済活動の広汎化が時代的潮流となり、その一方で、天明飢饉に代表される度重なる飢饉やそこから派生する社会不安等の発生も認められ、ひいては、武家の貧窮化、離農や遊民の増加、商人の富裕化などの影響下に伝統的な社会秩序の瓦解が進展することとなった。この局面の発生は、徳治主義、農本主義、貴穀賤商観といった従来からの伝統的な発想とはかけ離れた時代環境の創出をもたらすこととなった。他方、国際社会の中の日本といった観点からすれば、松前藩による統治が委任されていた蝦夷地やその北方諸島に対するロシアの南進と、北方エリアにおける本来の在住民であったアイヌに関する処遇が幕府にとっての複合的な国政課題として浮上し、海禁体制の維持を祖法遵守とした条件下に政策的関与が模索され、ロシアの動向、ロシアとアイヌの接触状況の把握、蝦夷地以北の諸島を含む北方エリアの地理情報の把握が目下の課題となった。

こうした時勢下に誕生した利明の経済政策論は為政者サイドへの提言を目的としたものであり、ヨーロッパを理想化しながらの日本国家豊饒化構想、植民地開発を視野にいれた国益増大化論、為政者主導による対外交易論などが良く知られるところである。この理解は、本庄栄治郎、阿部真琴、ドナルド・キーン、塚谷晃弘諸氏の成果^{*3}によりすでに一般化されているものであるが、拙著『近世日本の開発経済論と国際化構想—本多利明の経済政策思想—』（御茶の水書房、2016年）により、利明の史的価値は国内開発による国家豊饒化に基礎を置いていた点と、よく知られる対外交易論は後年になり付帯化された起案である点が明らかにされた。この分析結果は、経済政策思想の体系的な整理に基づきながら到達したものであるが、その一方で、とある課題が残されたことも認めなければならない。それは、日本の北方史の展開との関連下に利明の蝦夷地認識・ロシア観を体系的に位置づける作業である^{*4}。

この課題を意識しなければならなかったのは、北方事情に関する利明の業績^{*5}が事実として確認され、また、利明の経済政策思想との関連下に、「利明の主著『経世秘策』や『西域物語』は何れも寛政年間の著である。その所説が以上の如き内外の情勢（筆者注—武士の困窮・農村の疲弊・ロシア勢力の東漸）に刺戟せられた処甚だ大なるはいふ迄もない」^{*6}といった本庄栄治郎氏の指摘や、「利明の思想体系が完成されるのは、寛政期（1789～1800）である。それへの直接的契機は、天明飢饉（1783～1787）の際の奥羽旅行による深刻な体験である。"西欧流"自然科学によって学びえた「理」を基本とし、早くからの北方問題への関心の上に、この体験の加えた強い危機感は、急速に、そして飛躍的に社会・経済問題へと、彼の学問の主軸を転換せしめたのである。こうして彼の思想は、その経世策となって結実し、本書に収められた『経世秘策』『西域物語』、それから『経

済放言』などの主著に展開されていく」^{*7}と位置付けた塚谷晃弘氏の見解などが公のものとされていたからである。

ただし、これらの指摘は、必ずしも額面通りに受けとめるわけにはいかない。なぜならば、「内外の情勢」(本庄)あるいは「早くからの北方問題への関心」(塚谷)として簡略化された先学の指摘は、北方関連の著述内容に関する細微な分析や、その背景についての明解な整理に基づいているわけではないからである。したがって、この課題を解決化するための最適な方法は、利明の北方関連著述すべてについての個別的な分析を進めることと、経済政策論説の成立要因に位置するソースを明瞭化することである。その場合に、我々が着目しなければならないのは、塚谷氏の整理から漏れた資料や、ソースに該当するだろう利明が受信した情報の存在であり、ここに、後者に該当し本論説の分析対象に位置する書簡『乍恐以書付奉申上候』の名が強調されることとなる。

この『乍恐以書付奉申上候』なる表題が与えられた資料([写真1 『乍恐以書付奉申上候』]^{*8}参照)

は、本多利明の門弟であり、天明期以降の幕府による北方エリア調査に幾度となく随行した最上徳内(1755-1836)^{*9}から、この調査隊の上司である普請役の山口鉄五郎に宛てたとみられる天明6年(1786)成立の書簡であり、エトロフ島滞在時に作成された調査記録としての内容をもつものである。さらには、この書簡の写しがのちに師匠である本多利明の元へともたらされた形跡が認められるものでもある。こうした素材から、その内容面に着目した思想的影響に関心が向くのは言わずもがなであるが、その前に、我々が着手しておかなければならないことは、この資料についての書誌事項を確定化させることと、本多利明との関連下に成立事情を明確化させること、さらには同資料の本多利明への影響を指摘することである。本論説におけるこの重要課題を解決する場合に、本来的には、資料全文の細微な検討が求められることは自明の理であるが、紙幅の都合を考慮すると、『乍恐以書付奉申上候』の冒頭部の記載に対

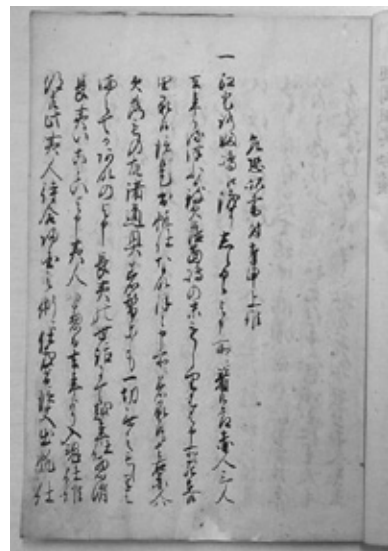


写真1 『乍恐以書付奉申上候』
(国立公文書館蔵)

する検討に限定化せざるをえない。ただし、上記の課題に一定の解答を与えるといった点からすれば、それ自体は従来の研究水準の底上げにつながると思われる。また、後述するように、『乍恐以書付奉申上候』が幕府の北方エリア調査との関連下に成立している点からすれば、本稿の検討結果が幕府の公式記録に該当する資料『蝦夷地一件』の分析を通じて明らかにされてきたところの北方史の鮮明化に寄与する可能性を有することを明示しておきたい^{*10}。

第1章 天明6年(1786)成立最上徳内書簡『乍恐以書付奉申上候』の書誌事項と本多利明

本稿に与えられた課題の解決化を進めるに際して、最上徳内書簡『乍恐以書付奉申上候』の書誌事項をまずは押さえておくべきであるが、この資料は現在のところ、徳内直筆のものは残存しておらず、寛政1年(1789)成立の『巡周蝦夷秘談』なるタイトルの編さん物に写本として所収されている。

この『巡周蝦夷秘談』との接触を可能とする所蔵先としては、①国立公文書館、②早稲田大学、③北海道大学が確認されるが、寛政1年(1789)以降成立の編さん物である①所蔵版は外題を『蛮夷巡周蝦夷秘談』、内題を『巡周蝦夷秘談』とするものであり、編さん者は不明であるものの、「序文」・2点の書簡【〈1〉『乍恐以書付奉申上候』・〈2〉『乍恐愚案奉申上候』】・"蝦夷三話"に該当する【『魯齊亜話』・『千嶋秘説』・『蝦夷千島話』】^{*11}により構成されており、②所蔵版の『巡周蝦夷秘談』は佐賀藩士の儒者であった古賀侗庵(1787～1847)の編さんによる『俄羅斯紀聞 第二集第四冊』^{*12}に最上徳内元吉著／本多三郎右衛門訂『赤蝦夷風説考』、最上徳内著『蝦夷拾遺』・『蝦夷拾遺別巻』とともに所収され、「序文」・2点の書簡【〈1〉『乍恐以書付奉申上候』・〈2〉『乍恐愚案奉申上候』】・『魯齊亜話』・『千嶋秘説』・『蝦夷千島話』を構成内容としている。なお、末尾に「丙子之春(筆者注-文化13年)」の侗庵による作成が記録されている。③所蔵版は、「巡周蝦夷秘談」といったタイトルは記載されておらず、外題を『千嶋秘説』とするものであり、2点の書簡【〈1〉『乍恐以書付奉申上候』・〈2〉『乍恐愚案奉申上候』】・『魯齊亜話』・『蝦夷千島話』・『千嶋秘説』の順序により構成されており、同書の末尾に「田正圖」と写字を行った人物の名が略記されている^{*13}。なお、〈2〉の文中にいわれる"蝦夷三話"が挟まれているなど、粗雑な編さん状況が認められる。

このように、それぞれが異なる収録状況下に残存している点が特徴的であるが、徳川時代の写本としての編さん物の場合、こうしたケースはまああることであり、内容面からすれば、最上徳内からの発信に幾つかの北方事情を併せた第三者による編さん物としての理解が適切であろう。いずれにしても、①～③ともに〈1〉『乍恐以書付奉申上候』を内包する『巡周蝦夷秘談』を所収していることは共通しており、とくに、①所蔵版については、[写真2 『巡周蝦夷秘談』「序文」]^{*14}の通り、「序文」の冒頭に幕府の地誌編さん事業への活用を示唆する「編修地誌備用典籍」の押印があるところから、幕府サイドによる徳内の発するところの情報収集が認められ、さらに、徳内が、北方エリア調査における初発の段階である天明5年(1785)から幕吏としての立場の下で現地に赴いていた事績や、その後、文化7年(1810)までの活動において、幕府の北方政策に長らく関与し続けた点を考慮すれば^{*15}、国立公文書館蔵『巡周蝦夷秘談』(外題は『蛮夷巡周蝦夷秘談』)^{*16}に内包された書簡〈1〉『乍恐以書付奉申上候』を分析対象とすることが、為政者側から公式記録に極めて近いものとして理解されていた資料の活用、といった意味合いにおいて適宜であるといえる。

以上の方針に則しながら、〈1〉『乍恐以書付奉申上候』の書誌事項についてもいくつか確定化させていきたい^{*17}。まずは、作成者・宛所・作成日についてであるが、書簡の文中に、

翌八日、飯振廻仕、段々相尋度旨種々有之候^{*18}

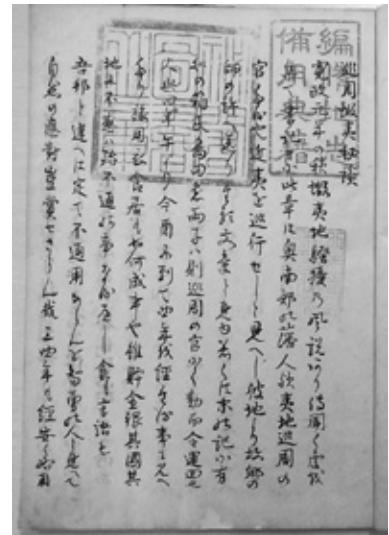


写真2 『巡周蝦夷秘談』「序文」
(国立公文書館蔵)

と天明6年(1786)5月5日～8日のエトロフ島における3人のロシア人との対面記が内包され、書簡の末に、

山口鉄五郎様跡方御出被成候処、拙者ゑとろふえ渡り候後、十日余宜き天気も不相見惣而風順悪く、早速御出之様子も不相知(中略)拙者不肖之義候へは、自分了簡を以取斗難致、何分急き候はゞ可然と奉存、赤人連れ参、御注進可申上様に仕候^{*19}

と、ロシア人の処遇について、東蝦夷地調査班の責任者の一人である普請役山口鉄五郎への報告を示唆する内容が記されている点、さらには、「山口一行は5月13日にエトロフ島のベトブに到着した。ところがそこから2丁程先の場所に、アイヌ舟に乗ってモシリハを出帆した最上徳内がロシア人2人とともに着岸した。最上はロシア人を舟に残すよう言い渡され、山口のところへ赴き、ロシア人が越年した顛末をしたための書付を差し出した」^{*20}といった史実を指摘したコー・スサンネ氏による研究成果を考慮すれば、少なくとも同資料の成立は天明6年(1786)5月8日～13日の間にみることができ、山口鉄五郎に先んじてエトロフ島に渡った最上徳内から、遅れて同島に向かいつつある上司に対して、エトロフ島にて作成された注進書とした理解が適切である。なお、確証はないが、もしかすると「顛末をしたための書付」は〈1〉そのものを指しているのかもしれない。

このような書誌事項の確定化につづいて、〈1〉『乍恐以書付奉申上候』と利明が接した時期についても位置づけを行っていきたい。この書簡は報告書としての特徴をもつものであることから、当然のことながら、〈1〉の文面自体にその形跡は見られる由もないのであるが、この書簡に記された

一 算盤を出し暦元を置き候、千七百八十六又置候は七万九十四^{*21}

という箇所と、天明8年(1788)1月に成立した本多利明と最上徳内共著ともいうべき『別本赤蝦夷風説考』^{*22}の中の一節、

一 算盤を出して暦元を置きて見せしに二千七百八十六
利明曰是はヲロシヤ当時頒行の暦の制作の年方
天明六丙午までの積年のなるへし^{*23}

が、若干の表記の違いはあるにせよ、見事なまでに呼応していることに気づく。この記載は、徳内がロシア人との対談において、ロシア理解による西暦の話題となったときのものであるが、徳内本人が直接知りえた情報に「利明曰」としたコメントが付されながら、両者の共同作業による『別本赤蝦夷風説考』が成立していることを考慮すれば、少なくとも、天明8年(1788)1月以前に、〈1〉と利明が接しているのは確実である^{*24}。

こうした利明—徳内の師弟関係に基づく北方情報の共有については、『巡周蝦夷秘談』の編さん者もうすうす気づいているところであり、たとえば、〈1〉の直前に記された「序文」に

近夷を巡行せしと見へし彼地より故郷の師の許へ送りとる文章と見ゆ^{*25}

と記し、北方エリアから師匠に宛てた内容であるとの推定が示されている。また、〈1〉の直後に収められた〈2〉『乍恐愚案奉申上候』の末尾の

此書状は高子員蝦夷地方北夷先生え差越候書状に而、前後之章は内用故除き候由、此書状に午の三月と有之は天明六年午の年に而御座候、珍説故写取り申候^{*26}

という記載を参考とすれば、元の姓である高宮の「高」と字の「子員」を合わせた「高子員」を意味する最上徳内その人が、「1782年8月の業績（筆者注—本多利明著の算学書『天元大意隠題解』を指す）だが、北夷として号している点、北方問題への関心の高まりがこの頃すでにあったことを示す」^{*27}とされる「北夷先生」、すなわち、本多利明に蝦夷地から書簡をもたらししていた形跡を編さん者側は既知していたことがうかがわれ、最上徳内（「高子員」）が北方エリア（「彼地」・「蝦夷地」）から江戸の本多利明（「故郷の師」・「北夷先生」）に宛てた書簡、という理解のもとで『巡周蝦夷秘談』の編さんが進められたという経緯が浮き彫りとなってくるのである。

このような特徴が認められる利明—徳内—北方エリアの関係については、同時代人の他者も理解するところであり、利明の晩年に門弟の宇野保定が記した『本多利明先生行状記』^{*28}には、

天文地理算術に通達する弟子九人^{*29}

の中に最上徳内の名があり、

是等の輩は利明先生の門人にて随一と称美して、各一門戸を張り、普く江戸まで聞へたる人々也^{*30}

との評価が寄せられ、さらには、

門人最上徳内と云ふもの、渡海の法を能ならひ得て一人乗船して蝦夷地に至り、東西の蝦夷の地利を量り、属島をも廻り、ラツコ島に至りて魯西亜人と対話杯して帰帆し、蝦夷草紙とて徳内記せる書を見て知るへし。徳内異国に乗渡せる事御禁をやふりし咎によりて入牢するを百余日。既に命を亡す場に至りけるか、本多翁色々の願を立るによりて助命の上に出牢し、浪士となりて東都に住する事数十年なりき^{*31}

と記されている。このことから、幕府の北方政策事業に参加し続けながら師に情報を提供し続けた最上徳内と、彼を江戸においてバックアップするのみならず、門弟徳内からもたらされた情報を参考とし続けた本多利明の関係は、北方事情への関心を共通項とした互惠関係にあったことが理解でき、その初期段階の遣り取りを裏づける資料が『巡周蝦夷秘談』^{*32}に所収された〈1〉・〈2〉書簡であるといえる^{*33}。

第2章 北方エリアの史的展開と本多利明・最上徳内

第1節 幕府の蝦夷地調査前史と本多利明・最上徳内

前章において、寛政1年(1798)以降成立の編さん物である『巡周蝦夷秘談』に所収された『乍恐以書付奉申付候』は天明6年(1786)5月8日～13日の間に最上徳内の手によりエトロフ島にて成立し、天明8年(1788)1月以前に本多利明のもとへもたらされたことが確定事項となったが、本節では、この資料成立の大前提にあたる時代背景、すなわち、徳川日本・ロシア・アイヌの交流が錯綜するところの北方エリアの史的展開の概容を利明・徳内との関連下に押さえておきたい。

徳川幕藩体制下において、アイヌ交易への主体的関与は場所請負商人を通じて松前藩が独占するところであり、蝦夷地不介入の方針が幕府の基調方針であった。その結果、ロシアとの外圧問題が生ずる18世紀中後期ごろまでには、松前藩の場所請負制はほぼ北海道島を覆い尽くすまでにいたり、そのかぎりでは本来アイヌ民族の領土であった蝦夷地の実質的な松前藩領域化^{*34}という状況が出現することとなった。

こうした蝦夷地に対する関心は、明和8年(1771)にロシアの捕虜であったハンガリー人ベニョフスキー(1746-1786)が流刑地カムチャッカから脱出したのち、長崎のオランダ商館などに日本の北方に対するロシアの侵食を警告した書簡を送り、それが幕府サイドへと通達された出来事により高まりをみせることとなる。補足すれば、この事件は、のちに林子平(1738-1793)による『海国兵談』(天明6年(1786)成立)^{*35}などの取り上げるところとなり、日本の一部に一大センセーションを巻き起こすこととなる^{*36}。

こうした経緯との関連として、秋月俊幸・岩下哲典両氏の精微な整理^{*37}を基礎としながらロシア側ならびにそれとの関係におけるアイヌの動向についても目を移せば、18世紀初頭、ロシア帝国ではピョートル1世(1672-1725)みずからが、日本に関心をもち、サンクトペテルブルクに日本語学校も作られていた。正徳1年(1711)にはコサック隊が千島列島シュムシュ島に上陸し、以後千島列島を南下する。享保13年(1728)にはベーリング(1681-1741)の指揮する探検隊が、ユーラシア大陸とアメリカ大陸の間に海峡を確認し、寛保1年(1741)には、アラスカやアリューシャン列島が認識されることとなった。とくに、ベーリング島においてラッコが「走る宝石」としてその商品価値を見出され、シベリアの毛皮狩猟者や商人の進出が顕著となる。その過程において、ベーリング探検隊の別動隊シュパンベルク(?-1761)は、千島列島を南下して、元文3年(1738)にはウルップ島まで到達する。なお、彼らは元文4年(1739)には、仙台から伊豆まで出現しており、日本ではいわゆる「元文の黒船」と称されている^{*38}。

寛保2年(1742)にカムチャッカに帰還した第二次ベーリング隊が持ち帰ったラッコの毛皮は、「物産豊盈」な中国でさえ生産しえぬ貴重な世界商品であることが判明し、以後ロシアの毛皮商人は、アリューシャン列島、アラスカへと進出してラッコを捕獲し、それをオホーツク港から陸路イルクーツク、キャフタ、北京へと毛皮を運ぶ「キャフタ貿易」を大きく発展させることとなった^{*39}。その影響下に、ロシア人たちの千島列島南下がヤサーク徴収の強化のために進展し、その結果、南方に逃れるアイヌたちが続出したので、ロシア人たちは彼らを追跡してさらに南下し、ついにラッコの豊富なウルップ島を知り、やがてこの島におけるラッコ猟が定着するのである^{*40}。それとの関連として、ノツカマップ、キイタップ、アツケシおよびクナシリ島やエトロフ島における強力なア

イヌの首長領は、北海道から遠くはカムチャッカ半島にまで延びる商業圏となり、ロシア人狩猟者たちが太平洋に出現し、ロシアの朝貢制度の浸透とあいまって、それらの商業ネットワークはロシアの市場にまでつながることとなった^{*41}。その一方で、明和7年(1770)から翌年にかけては、ウルップ島に上陸したロシア人と、エトロフ島アイヌとの間でトラブルも起こっている^{*42}。

このような経緯を背景としながら、のちの幕府による北方エリア調査と大きく関わる田沼意次(1719-1788)が安永1年(1772)1月15日に老中に就任する^{*43}。田沼政権下の安永4年(1775)にはアンチーピン(??)の探検隊が千島に派遣され^{*44}、安永7年(1778)春にはシャバーリン(??)が北海道へ向かうためにエトロフ島、次いでクナシリ島に渡る。ロシア人がクナシリ島に上陸したのはこれが最初であった。その後、彼はノツカマップに到着するも、いったんオホーツクに戻った後、翌年夏に再びウルップ島、クナシリ島、ノツカマップを経由したのち、松前藩の拠点アツケシに到着し^{*45}、同藩に通商を持ちかけた。これに対して、松前藩は通商要求を拒絶し、ロシア人に対してクナシリ・エトロフに來航することを禁止するのである^{*46}。

ただし、このような重要事項について、松前藩はシャバーリン一行のロシア人たちの蝦夷地到来の事実を幕府にも秘しており^{*47}、また、抜け荷への関与疑惑もあいまって、同藩に対する不信感が増幅し、既存のベニョフスキーの警告や、対ロシア政策を趣旨とした仙台藩医工藤平助(1734-1800)による『加模西葛杜加国風説考』(別名『赤蝦夷風説考』)^{*48}の内容を参考としながら、北方事情の正誤確認を要求する気運が高まり、田沼のブレーンである勘定奉行松本伊豆守秀持(1730-1797)により、幕吏の派遣による蝦夷地の実情や金銀山の調査の実施が上申される^{*49}。田沼意次は、松本に蝦夷地取調べを命じ、さらには、天明5・6年(1785・6)に普請役を蝦夷地に派遣し、実地見分を行わせることとなった^{*50}。すなわち、幕府による最初の蝦夷地調査隊の派遣であり、換言すれば、徳川日本により公の対ロシア・アイヌへの接触が図られた国家的事業の開始である。

この天明5・6年の蝦夷地調査隊こそが、『乍恐以書付奉申付候』の成立を用意することとなるのであるが、執筆者である最上徳内の同調査隊への参加について、興味深い記録がある。それは、後年となる寛政1年～2年(1789～1790)にかけて本多利明が著した『本田氏策論 蝦夷拾遺』の同1年11月付けの「序文」であり、その内容は以下の通りである。

浚廟の御時天明五乙巳翌丙午兩年の内、本朝の属島蝦夷国界御見届御用被仰出たり。依之彼地え有司可被差遣に極れり、於是利明窺に懷ふに、幸甚成る哉此時に逢ふ事、何卒して彼地へ我党を假令匹夫に成り共為し遣し度、因之謂を設け、其筋の有司に便り是を請ふ。漸く成て余か末弟最上徳内といふ無禄人あり、此者を彼地へ先陣に契諾決整したり。小計策に當りて蝦夷土地に遣しけり。東都よりは遙に数百里を隔たる嶋成れば、土地風氣の異なるは必然たり、百菓百穀の出産の豊歉、皆是北極の出度に因りて検査する事にして、則天文算数の預る所なり。依て彼地处々に於て日月星辰の高低を測量し、北極出度を測歛し、山海の諸産を探索し、金銀銅鉄山を穿鑿せしに、甚の最良国なる事、余生涯の案に差ふ事なし、時到らは此事を何卒して上に奏し奉んと常に希ふ所なり、是太平の□御代に生遇、御国恩のありかたさを常に忘れかたきの微意なればなり。

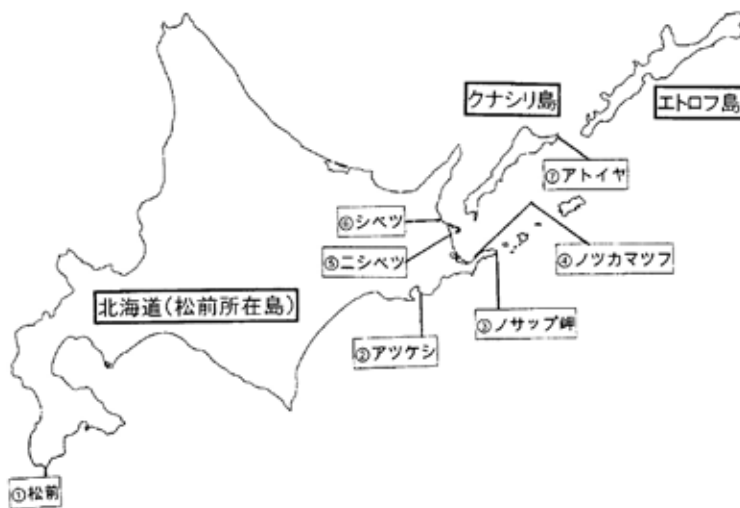
寛政元巳酉年十一月 本多利明甫^{*51}

この「序文」には、天明5年（1785）からの蝦夷地調査隊の派遣に際して、本多利明が「其筋の有司」である幕府関係者に掛け合った結果、「余か末弟最上徳内といふ無禄人」が一行に加えられたという経緯が示されており、また、師である利明の目的は、最上徳内を通じた北方エリアの地理や産物などの情報収集に置かれていることも示されている。この記録と、のちに成立することとなる利明の開発経済論の主張において、北方エリアが属島開発の主要地域の一つに位置することとなる点を考慮すれば、利明の見通しを証するために、あるいは確実な情報による将来的な論説作成を成就させるために、門弟最上徳内の蝦夷地調査隊への参加は、利明からしても必要なことであったと理解しうる。

この引用との関連として、同様の記載を内包した資料『利明上書』（寛政3年（1791）10月成立）がすでに藤田覚氏により紹介されており、同氏は、「以前から知人である普請役の青嶋俊蔵が蝦夷地見分御用を命じられたので、頼み込んで竿取足軽に召し抱えてくれることになったが、本多利明はおり悪しく病気のため、代わりに「天文地理之心得」のある門人、最上徳内を送ったという経緯が述べられている。事実は不詳だが、利明が青嶋に自身を売り込んだという経緯になっている。いずれにしても、青嶋俊蔵—本多利明—最上徳内という線で、徳内の蝦夷地派遣が実現した」*⁵²との見解を示している。この『利明上書』についての指摘と『本田氏策論 蝦夷拾遺』の記載双方を併せもってすれば、「其筋の有司」とは、徳内が同行することとなる東蝦夷地調査班の上司2人のうちの青嶋俊蔵（他方の上司は山口鉄五郎）であったと位置づけることができる。

以上による、徳内の調査隊への参加の経緯を念頭におけば、徳内から利明に対して北方エリア情報を伝達すべき必然的な関係性が、調査の開始前から形成されていたことを留意すべきであろう。

第2節 天明5・6年（1785・6）幕府の蝦夷地調査と最上徳内の動向



図A：北海道・クナシリ島・エトロフ島地図

前節は、北方エリアの史的展開が天明5・6年（1785・6）における最上徳内の蝦夷地派遣へと帰結し、それに利明の関与が認められるといった一連の流れを追ったものであるが、この調査隊発足以降の展開について分析を進めてゆく。本節では、蝦夷地派遣に関する幕府側の公式文書である『蝦夷地一件』における最上徳内の足跡に注視しながら、その行程を〔図A：北海道・クナシリ島・エ



図 B：クナシリ島・エトロフ島地図

トロフ島地図]ならびに[図 B: クナシリ島・エトロフ島地図]^{*53}を参照しつつ明示していきたい。その際、従来活用されてきた『蝦夷地一件』とは別に、新たな資料『蝦夷廻見日記』^{*54}を使用したコー・スサンネ氏ならびに秋月俊幸氏の精微な研究成果^{*55}がこれに関わる成果としては、現在の水準であることから、両氏による丁寧な史実の再現を参考としながらの論旨展開とな

ることをあらかじめ断っておきたい。

天明 5 年（1785）、

此度金銀山、且諸産物等、都て蝦夷地の様子為見分御普請役山口鐵五郎 庵原弥六 佐藤玄六郎 皆川冲右衛門 青嶋俊蔵差遣候間、彼地案内等の儀は不及申、諸事無差支様被取計^{*56}

という『蝦夷地一件』の記載にみられるように、普請役佐藤玄六郎・皆川冲右衛門・山口鉄五郎・青嶋俊蔵・庵原弥六の 5 名を首班とする蝦夷地調査隊が組織され、幕府による蝦夷地調査が開始された。そして、前節の指摘通りに、最上徳内は青嶋俊蔵の竿取として帯同することとなった。なお、この徳内の職務については、翌天明 6 年（1786）の調査時の記録ではあるが、

御普請役

青嶋俊蔵

竿取 徳内^{*57}

と同資料に記載されているところである。

天明 5 年（1785）2 月中に江戸を出立した調査隊一行は 3 月半ばに松前に到着し、東蝦夷地調査班（山口・青嶋）・西蝦夷地調査班（庵原）・松前の総括予備班（佐藤・皆川）とした役割分担のもと、4 月には松前（A ①）をおのおの出立し、各自調査を進めることとなった。山口・青嶋ならびに徳内らよりなる東蝦夷地調査班は、アツケシ（A ②）からノサップ岬（A ③）を回ってシベツ（A ⑥）に達し、8 月中にクナシリ島に渡り、同島東北端のアトイヤ岬（A ⑦）まで達したのちアツケシ（A ②）に戻り、松前（A ①）に帰還して越冬した。

翌天明 6 年（1786）には、再度の北行が実施され、徳内は山口・青嶋一行よりも先となる 1 月に単身で松前（A ①）を出発し、アツケシ（A ②）からアツケシ乙名イコトイとともにクナシリ島に先行し、同島北端のアトイヤ（A ⑦）で後追いの山口（1 月 26 日松前出立、3 月 20 日クナシリ

島到着)の到着を待ち、4月15日に再会したのち、4月18日にアイヌ従者フリウエンを帯同して単身クナシリ島のアトイヤ(A⑦)を出立し、5月はじめにエトロフ島に着岸した。この行程については、注57引用文に続く

是はエトロフ ウルツフ島の方為先渡、当正月廿日松前出立為仕候処、アツケシの蝦夷人フリと申候ものを通詞にいたし召連、四月十八日エトロフえ相渡申候^{*58}

という記載が『蝦夷地一件』にあるように、最上徳内の行動は山口・青嶋の「先渡」として単身であったところが特徴的であり、さらには、5月5日にモシリハのシュルシャム(B⑦)へ達し、3人のロシア人(筆者注—イジュヨ、サスノスコイ、ニケタ)と出会うこととなる。それは前年にウルツフ島から移ってきたというロシア人たちであり、8日までの間、彼らと連日の会談が行われる。後続の山口鉄五郎(4月30日クナシリ島出立、5月3日エトロフ島ナイホ(B③)到着、5月9日同島シヤナ(B④)到着)らが5月13日にエトロフ島のベツトブ(B⑤)に到着したとき、徳内が3人のロシア人たちを帯同してモシリハ(B⑦)から戻ってきた。なお、我々はこの時点において、前章で明らかとなった書簡『乍恐以書付奉申上候』の成立時期(5月8日～5月13日の間)を想起すべきである。

山口の方針は、ウルツフ島への渡航を急ぐというものであり、したがって、彼らロシア人をコエトイ乙名マウテカアイノに預け、徳内ともども6月1日にエトロフ島北端のアトイヤ(B⑧)を出船して、ウルツフ島のモシリヤに上陸したのち、同島の周回調査を進め、6月16日に再びアトイヤ(B⑧)に帰着した^{*59}。

ウルツフ島からエトロフ島へと帰還した山口・徳内一行のその後についてであるが、山口については、ウルツフ島調査時にこれまた後追いでエトロフ島に到着していた青嶋俊蔵と、3人のロシア人のうち2人を同行して7月10日にクナシリ島の運上屋(筆者注—ヲトシルベカ)^{*60}に到着し(6月23日エトロフ島シヤナ(B④)着、28日同島ナイホ(B③)着、7月1日同島タンネモイ(B①)着)、一方、6月21日にエトロフ島北部を出船した最上徳内は、アツケシ乙名イコトイの舟でエトロフ東岸の周回調査を行いながら、山口の待つクナシリ島の運上屋(筆者注—ヲトシルベカ?)に向かい、その後再度の合流を果たす^{*61}。当地において、徳内は2週間に及ぶロシア人たちとの共同生活を通じてアイヌ語で詳しくロシア事情の聴取をおこない、そこで地理・歴史・政治・産物・交易・宗教・言語・暦法その他にわたる詳細なロシア知識を得ることとなった^{*62}。それとは別途、公式の尋問が山口・青嶋・徳内出席のもとで7月26日・27日に実施されたのちに、山口は松前藩士を通じてロシア人たちに本国への帰国を命じ、彼らは同月28日にアイヌの舟でエトロフ島へと送還された^{*63}。なお、サスノスコイは本国に戻ったが、イジュヨは7年間のあいだエトロフ島に留まっていたという^{*64}。残る人物、すなわち、クナシリ島での尋問へと同道しなかったニケタに関しては、

竿取のもの一人暫く赤人に附添置候処、赤人三人の内、壹人は蝦夷船を相頼、島伝ひに致帰国^{*65}

と、2週間に及ぶ「竿取」最上徳内と2人のロシア人が共同生活をしている間に、滞在先のエトロ

フ島から単身帰国したことが『蝦夷地一件』に記されている。

その後、7月30日に山口・青嶋・徳内らはクナシリ島を出発し、ノツカマップ（A④）を経由して、8月3日にアツケシ（A②）に到着したのち、「鐵五郎は右御用船（筆者注一五社丸）に乗組、同（筆者注一八月）十二日同所（筆者注一アツケシ）出帆、昨廿一日松前へ帰着。俊蔵儀は当八月九日アツケシ出立、陸路を罷帰候」^{*66}と記録されているように、各々別々のルートを取りながら、幾つかの業務をこなし、最終的に山口は8月21日、青島は9月上旬に松前へと帰還した^{*67}。一方、徳内は、アツケシ（A②）からニシベツ（A⑤）に赴き、「御試交易」^{*68}に携わったのちアツケシ（A②）出発し、帰路についたのは8月下旬と推定されている^{*69}。

そのような彼らは時勢と向き合わなければならなかった。すなわち、将軍徳川家治（1737-1786）の逝去とそれと関連するところの田沼意次の失脚（天明6年（1786）8月27日）、ならびに松本秀持の罷免（同年閏10月）であり、その影響下に10月には蝦夷地調査が打ち切られることとなった。こうした幕府内の情勢変化のあおりを受けたのは蝦夷地探検に参加していた一同であり、徳内は蝦夷地調査を続けるため単身松前に残っていたが、結局のところ同藩から追放されることとなるのである^{*70}。

以上の経緯として整理される天明5・6年（1785・6）の蝦夷地調査の史的意義を、最上徳内との関連下にいったんまとめるとすれば、一つとして、「天明5・6年（1785・6）の幕府最初の蝦夷地調査に徳内も加わり、雇身分ながらエトロフ島・ウルップ島を見分し、ウルップ島ではロシア人にも会って多くの情報を聞き取り、その成果は、御普請役佐藤玄六郎などが著した報告書『蝦夷拾遺』にも反映された」^{*71}、あるいは、「天明6年（1786）にエトロフ島・ウルップ島へ渡航した山口鉄五郎と最上徳内は各島のかなり見事な地図（『蝦夷風俗人情乃沙汰図』）を作成している」^{*72}、とされるように、派遣された幕吏の成果報告が徳内の貢献を吸収しながら残されることとなり、それが、のちの対北方エリア政策の模索に際して、大きく参考とされることとなった点や、徳内自身が、後年に利明宅で草稿した^{*73}『蝦夷草紙』〈寛政2年（1790）9月成立〉^{*74}や、同年2月において同書を整理したものに同3年（1791）1月付の本多利明の「序」が寄せられた『蝦夷国風俗人情之沙汰』^{*75}、さらには、『蝦夷草紙後篇』〈寛政12年（1800）1月成立〉^{*76}を著すなど、幕府の北方エリア政策との関連下に北方事情がまとめられ、為政者のみならず、流布による情報伝播を準備・促進した点を強調しておきたい^{*77}。

第3章 天明6年（1786）成立最上徳内書簡『乍恐以書付奉申上候』冒頭部と本多利明著『自然治道之弁』

前章において、天明5・6年（1785・6）の北方エリア調査の史的展開について触れてきたが、その内容は、幕府の公式記録である『蝦夷地一件』や『蝦夷廻見日記』の検討に力点を置いた先行研究に依拠するものであり、これらに基づく通説に、徳内や利明によるよく知られた成果を関連づけたものである。本章ではこうした従来からの見解の正誤確認、あるいは補完を考慮しながら、最上徳内自身の発信、すなわち、天明6年（1786）成立最上徳内書簡『乍恐以書付奉申上候』冒頭部の内容と、その利明への影響について分析を進めてゆきたい^{*78}。その場合に、同資料の内容が、(1) ロシア人との初対面前の動向、(2) 5月5日～8日の記事内容、(3) その後の備忘録、により構成

されているところから、本来は (1) ～ (3) すべてを網羅すべきであるが、" はじめに " で触れたように、紙幅の都合上、(1) のみを、とくにはその冒頭部のみを紹介し、本多利明との関連性を明示すべく意図のもとで論旨を進めてゆくこととする。なお、本節においても、様々な地名が頻出するが、第2章第2節にて使用した「図A：北海道・クナシリ島・エトロフ島地図」・「図B：クナシリ島・エトロフ島地図」を再度、活用しながら論旨を進めてゆくこととなる。

その、『乍恐以書付奉申上候』の冒頭部は以下のようなものである。

えとろふ島え渡り、しらくと申所に着候節、赤人三人去年うるつふ致欠落、当嶋の末もしりはと申所に罷在候由承候。従是出帆仕ないほと申所に着、承候には右赤人は欠落もの故、諸道具着替等も一切無之、もしりはまうてかあいのと申長夷の世話にて越年仕、悪消長夷いこといと申夷人は兼て去年より入魂仕候得共、此夷人待合、帰国之術に仕度旨、従夫出帆仕しやなと申所に而承り候には右赤人は本国方到来仕候者にて外乗組之者は本国方遠き嶋の者共に而、不法之振舞仕候を制禁致、此懸に依て乗合致兼候。出帆之節、山に逃け身を隠し候処、赤人共尋廻り、砂中に埋め置候物、鉄砲、手道具、着替等掘出し皆奪取、出帆致罷帰候。其後、夷人船に乗組、もしりはに罷帰候由承り候。夫より出帆いたしなほに着仕候処、去年つきのい方方赤人の被^レ仰付候趣、預り置夷人はうしび住居候得とも、呼出し相尋候処、去秋中、風順悪しく渡り兼罷在候内、うるつふ帰帆之船着仕、赤人皆帰国仕、忝人も不罷居候趣承り候。いまた私方に差扣置候赤人義は、此間、夷人便りに、悪消長夷、和人乗組着仕候様子相知れ、殊之外悦待居候由。被^レ仰付候趣は、去年帰国仕候赤人共に遣し、度々先年、悪消迄参り候者に而、早速通船も成易く、殊交易望有之者に而、唯今当嶋に罷居候赤人は、本国者共に而遠方に候間、差扣罷居候由申候^{*79}

ここには、徳内がアイヌ従者のフリウエンとともに、おそらくは日本人としては初めてエトロフ島に到着した5月の初めからの同島における道程〈シラルル (B②) → ナイホ (B③) → シヤナ (B④) → ナイホ (B⑥)〉ならびに、経由した先々にて入手した情報がまとめられている。

最初に到着したシラルル〈(B②) (筆者注-「しらく」)〉では、離脱したロシア人たちがエトロフ島のモシリハ (B⑦) に滞在中であるとの情報を得、続くナイホ (B③) では、ロシア人たちはモシリハ乙名マウテカアイノの保護下に越年し、本国ロシアへの帰還手段を模索していることや、アツケシ乙名イコトイと彼らは天明5年(1785)以来の懇意の間柄になっていることを知り、次のシヤナ (B④) では、ロシア本国からウルップ島を訪れた彼らは、同道してきた仲間たちと対立し、結果として同島に置き去りにされ、その後アイヌの舟にてエトロフ島のモシリハ (B⑦) に滞在することとなったとの風聞を入手し、最後のナイホ (B⑥)^{*80}では、残されたロシア人たちは先だって交易を要望するためにアツケシ (A②) を訪問した使節の一員であり、ロシア本国に帰国できない何らかの事情があって、「差扣」、すなわち動けない状況にあるとの情報を得ている。これに際して、徳内は、天明5年段階の調査時にクナシリ島の乙名であるツキノイが、ロシア人たちを直接保護下に置くハウシビから聴取した情報として、同胞を置き去りにしたロシア人たちは本国へ帰国してしまい、ウルップ島にはすでに一人もおらず、一方、残されたロシア人たちは、アツケシ乙名イコトイと「和人」すなわち蝦夷地調査隊の北上を知り、今後の境遇の打開を期待しながら喜んで

いること、といった情報を回顧している。

この部分において留意すべきは、エトロフ島におけるロシア人の滞在を既成事実として意識しながら記されている点と、彼らはアツケシ（A②）まで到来した使節の一員、つまりは、松前藩との交易を望んだ安永8年（1779）のシャバーリン一行を示唆する情報が記されている点である。

この記録を念頭に置きながら、ここで、本多利明の経済政策論の嚆矢に該当する『自然治道之弁』（寛政7年（1795）成立）^{*81}に目を向けてみたい。同書は、国家豊饒化を目した開発経済論として位置づけられるものであるが、その文中に、

天明乙巳年の夏も、シメヲントロハイイチイシユヨ〔三才〕、イワンエンゴトサスノスコイ〔天蔵〕、僕ニケタ〔三才〕、主僕三人東蝦夷エトロフ嶋へ渡来滞留せり明和安永の頃よりカムサツカより南方洋中の嶋々凡十八九嶋を横領〔東蝦夷の諸島なり〕各塞を築き官を開き土人を撫育して政務を執行ひ租税を取てモスコビヤへ運送するといへり^{*82}

という興味深い記載がある。これは、「イシユヨ」・「サスノスコイ」・「ニケタ」を明記される人名、すなわち、3人のロシア人を示唆した部分であるが、彼らが「天明乙巳年」に該当する天明5年（1785）にエトロフ島に到着したという話は、徳内がシラルル（B②）やナイホ（B③）で得た、ロシア人達がモシリハ乙名マウテカアイノの保護下に天明5年（1785）より越年し、翌6年（1786）の時点で、エトロフ島のモシリハ（B⑦）に滞在しているといった取材内容と合致し、「主僕三人東蝦夷エトロフ嶋へ渡来滞留」といった事実を、「明和安永の頃」よりのロシア南進の趨勢として把握しているところは、徳内のナイホ（B⑥）での記録、すなわち、残されたロシア人たちは先だって交易を要望するためにアツケシ（A②）を訪問した安永8年（1779）のシャバーリン一行とした内容と合致している。

こうした指摘から、我々は、徳内の取材が利明の著作へ反映されていることを認めなければならない。なおかつ、第1章で明らかにしたように、天明8年（1788）1月以前に利明は『乍恐以書付奉申上候』と確実に接し、「利明曰」としたコメントを付記した『別本赤蝦夷風説考』を徳内との共同作業として成立させた点を考慮すれば、少なくとも、同書同様に、利明が徳内の取材内容に依拠しながら、『自然治道之弁』を成立させたことは確実であるといえる。

上記の照合により、『乍恐以書付奉申上候』と『自然治道之弁』の関係性が明らかとなったが、それでは、利明は徳内から提供された情報をどのように活用しようとしたのだろうか。それを知るためには、『自然治道之弁』の全体的な内容を拙著^{*83}によりながら確認しておかなければならない。同書は、日本国家全体を適応範囲とする日本国「豊饒」化構想を政策提言としたものであり、全国的傾向としての国内生産力低下と物資需給問題、国内社会秩序の混乱問題、ロシア南下情勢に基づく蝦夷地問題への対応策を整理したものであり、焰硝活用政策案、鉱産資源活用政策案、船舶活用政策案、属島開発政策案の4政策案を内容とするいわゆる、「四大急務」政策の具現化を要望したものである。とくに、属島開発政策案については、

ウルップエトロフクナシリカラフトの四嶋取留おかば日本国より二三倍もあらむ大国を得へし。若又手延ひにならば異国に属すへき勢ひ^{*84}

という記載がみられるように、北方エリアの諸島の開発の必要性を説き、それによる国内生産力の増大化を目している点において、クナシリ島やエトロフ島を実際に訪問した門弟徳内から寄せられた情報を活用しながら、それを利明の自説に組み込んでいた形跡が認められる。

以上の指摘を簡潔にまとめるならば、次のようになるだろう。天明5年(1785)から始まる幕府の北方エリアの調査に、本多利明の推挙により帯同することとなった門弟最上徳内が、翌6年(1786)5月8日～13日の期間にエトロフ島において上司山口鉄五郎に宛てた注進書を作成する。それを天明8年(1788)1月以前の段階において入手(筆者注-写しか)していた師匠利明は、徳内の取材内容を活用しながら、寛政7年(1795)1月に開発経済論の嚆矢的著作『自然治道之弁』を成立させる。その場合、単なる内容紹介のみにとどまることなく、属島開発政策案の中に組み込んでいくところに特徴がみられるといえよう。

おわりに

さいごに、本稿に与えられた課題、すなわち、最上徳内書簡〈1〉『乍恐以書付奉申上候』冒頭部と本多利明著『自然治道之弁』の関係性の明瞭化、ならびに、徳川日本・ロシア・アイヌにより構成される北方エリア史のさらなる鮮明化、をそれぞれ念頭におきながらこれまでに指摘してきた位置づけを簡潔にまとめておわりとしたい。

まずは、書簡『乍恐以書付奉申上候』の成立事情と書誌的位置づけに関してであるが、同資料は、天明5年(1785)から始まる幕府の蝦夷地調査への最上徳内の参加を発端としながら成立したこと、この調査事業への同行は、門弟の派遣を通じて北方エリアの情報を入手しようとしていた師匠本多利明の仲介によるものであること、北方事情への関心を共通項とした双方の互惠関係を背景として成立したことが確認された。また、『巡周蝦夷秘談』〈寛政1年(1789)成立〉に写本として所収された同資料は、日本人として初めてのエトロフ島到着後の天明6年(1786)5月8日～13日の間に同島にて徳内が作成したものであり、東蝦夷地調査班責任者である上司の普請役山口鉄五郎への報告を内容とする注進書であることも確認された。さらに、別書である『別本赤蝦夷風説考』との照合作業をもって、天明8年(1788)1月以前にこの書簡と利明が接していることも明らかとなった。なお、この成立年月日の特定化に関する作業を通じて、『蝦夷地一件』や『廻見蝦夷日記』を主要な分析対象とした秋月俊幸氏やコーラ・スサンネ氏による北方史研究の成果を補強することとなった点も付言しておきたい。

また、『乍恐以書付奉申上候』冒頭の内容から、エトロフ島到着後の徳内の行程が、シラルル→ナイホ→シヤナ→ナイホ→モシリハのシュルシャムであり、そこで得た情報を一助としながら、後年に本多利明が著すところの『自然治道之弁』が成立し、開発経済論への関連性が認められる点が明らかとなった。この事実は、徳川日本・ロシア・アイヌの交流史の展開から派生した思想的影響のワンケースとして理解することができ、換言すれば、最上徳内を北方事情についてのプラットホームとした史的展開とも強調しうるだろう。なお、この位置づけに付言すれば、管見の限りであるが、現段階における徳内関連および利明関連の資料の残存状況からすると、〈1〉『乍恐以書付奉申上候』は、徳内から利明へともたらされ、なおかつ参考とされた情報の中でも、初発のものに該当する可能性が高いといえる^{*85}。

-
- * 1 数学史における本多利明を紹介したものとして、遠藤利貞氏による『増修日本数学史』（私家版、1896年）がある。算学者としての利明の評価の高さは、寛政6年（1794）に彼が筆頭となり関孝和（1640頃-1708）の碑を建て、百年忌を主宰している〈塚谷晃弘「解説 本多利明」『日本思想大系 44 本多利明 海保青陵』（岩波書店、1970年）、446頁〉ところから知ることができる。
 - * 2 本多利明の没年月日は文政3年12月22日であり、西暦に換算すると1821年1月25日に該当する。したがって、没年は1821年と表記した。
 - * 3 日本経済思想史研究の側からは、①本庄栄治郎「徳川時代の経済学者、本多利明の研究」『経済史研究』（弘文堂、1920年）・同「本多利明の研究」『近世の経済思想』（日本評論社、1931年）・同「本多利明集解題」『本多利明集』（誠文堂新光社、1935年）・同「本多利明の研究」『日本経済思想史研究（下）』（日本評論社、1966年）〈「本多利明集解題」の加筆再録〉、②阿部真琴「本多利明の伝記的研究（1）～（6）」『ヒストリア』11～13・15～17号（1955～57年）、③塚谷晃弘「解説 本多利明」・「江戸後期における経世家の2つの型」『日本思想大系 44 本多利明 海保青陵』（岩波書店、1970年）を代表的成果として挙げて得る。又、補記すれば、④Donald Keene（1969）*The Japanese Discovery of Europe, 1720-1830* Revised Edition, Stanford University Press (1969). 〈芳賀徹訳『日本人の西洋発見』（中央公論社、1982年）〉、*The Japanese Discovery of Europe, Honda Toshiaki and Other Discoverers 1720-1798*, Routledge and Kegan Paul (1952). 〈藤田豊・大沼雅彦訳『日本人の西洋発見』（錦正社、1957年）〉も利明を国際的に知らしめた点において価値がある。尚、Revised Edition版には平田篤胤等に関する成果が加筆されている。これら①～④の成果に加えて、⑤宮田純『近世日本の開発経済論と国際化構想—本多利明の経済政策思想—』（御茶の水書房、2016年）は新たな利明研究に位置している。
 - * 4 参考までに課題の部分抜きを抜粋しておく。「日本の北方史の展開との関連下に利明の蝦夷地認識・ロシア観を体系的に位置づける作業である。本書において検討を加えた諸資料とは別に、利明は主に門弟の最上徳内を経由した北方情勢に関する情報を入手し、それを独自の理解でもって記録している。管見の限り、本書の主要課題であった国内開発・国際化構想を組成する主要論説としての位置づけは困難であるものの、少なくとも、この構想を準備する知的素養に位置している可能性があり、天明～寛政期に成立した北方関連著述の意義を体系的に整理する必要があるだろう」宮田純『近世日本の開発経済論と国際化構想—本多利明の経済政策思想—』（御茶の水書房、2016年）、310頁。
 - * 5 塚谷晃弘氏は利明の業績における北方問題部門として『大日本の属島北蝦夷之風土草稿（1786年1月）』、最上徳内著・利明訂の『赤蝦夷風説考』（1786年）、『蝦夷拾遺』（1789年以降）、徳内著『蝦夷国風俗人情之沙汰』の「序文」（1791年1月）、『蝦夷土地開発愚存之大概』（1791年1月）、『蝦夷開発に関する上書』（1791年10月または1792年7月）、人見璣邑問・利明答・朝比奈厚生校『外郎異談』（1794年閏11月）、徳内述・利明校『北辺禁秘録』（1795年正月）、『蝦夷道知辺』（1801年正月）を列挙している〈前掲塚谷（1970）、449～450頁〉。なお、同氏は、整理に続いて、「利明はまずこの部門で業績を積む。眼が国内にむけられるのは1794年の福山藩調査行（『西薇事情』）からである」（同書、450頁）、「北方問題の系統としては、『赤蝦夷風説考（1783年）』の工藤平助、『三国通覧図説』『海国兵談』（1785・6年）の著者、林子平に連なるものと考えてよい」（同書、447頁）といったコメントを寄せている。
 - * 6 本庄栄治郎「本多利明集解題」『本多利明集』（誠文堂新光社、1935年）、25ページ。なお、（筆者注一）の部分は同書、23頁より。
 - * 7 前掲塚谷、455頁。また、同氏は、「利明の蘭学への傾斜は、算数や天文・暦学と相まって、通商・航海を重点

とする経世論に導くのだが、その前に18世紀のはじめ以来のロシアの千島・蝦夷地進出を機とする北方問題に強い関心を示し、これがその経世論を大きく性格づけたことに注目しなければならない」（同書、447頁）とも指摘している。

- * 8 国立公文書館蔵『巡周蝦夷秘談』（請求番号：178-0253）に所収。
- * 9 最上徳内（1755-1836）の略歴は以下に整理される。出羽出身の探検家・算学者・儒者。天明1年（1781）に江戸の本多利明の私塾に学び、その後、同5年（1785）以降の幕府の蝦夷地調査に携わり、クナシリ島・エトロフ島へ単身で渡った。田沼失脚の余波を受けて失職したのち、寛政年間には再び幕府の蝦夷地政策に幕吏として重宝された。北海道や千島列島での調査を通じて、ロシア事情や現地アイヌの事情などを幅広く収集し、それが様々な経路により多くの人々に伝わることとなった。主な著作に『蝦夷草紙』、『蝦夷国風俗人情之沙汰』、『度量衡説統』、『論語纂訓』などがあり、シーボルトとともにアイヌ語の辞典編さんも行っている。なお、最上徳内の伝記的研究として、皆川研究〈皆川新作『北辺の先覚者 最上徳内』（電通出版部、1943年）・同「村山市植岡 最上徳内史料」『古文書近世史料目録』第11号（山形大学附属博物館、1978年）〉・島谷研究〈島谷良吉『最上徳内』（吉川弘文館、1977年）〉・吉田研究〈吉田常吉「解説」吉田常吉編『蝦夷草紙』（時事通信社、1965年）〉を列举することができる。最上徳内研究の現在形としては、川上研究〈川上淳『近世後期の奥蝦夷地史と日露関係』（北海道出版企画センター、2011年）〉所収論文が水準といえ、その他に、松本斗機蔵（1793 - 1841）の整理による『蔵書目録』（横浜市立大学鮎沢信太郎文庫蔵）に掲載された書名などから〈大野延胤「松本斗機蔵とその著述・序説」『学習院女子大学紀要』第2号（学習院女子大学、2000年）、51～67頁〉新たな徳内像を提示するかもしれない。
- * 10 筆者は、これまで、利明の北方関連著述についていくつかの成果を提示し続けてきた。以下にそれを列举しておく。「本多利明の国家論—徳川時代における〈エスニシティ〉の発見—」黒田弘子／長野ひろ子共著『エスニシティ・ジェンダーからみる日本の歴史』（吉川弘文館、2002年）、「本多利明の北方開発経済思想—寛政三年成立『赤夷動静』を中心として—」『日本経済思想史研究』第4号（日本経済思想史研究会、2004年）、「徳川時代の北方開発政策論—本多利明著『大日本国の属嶋北蝦夷の風土艸稿』を中心として—」『中央大学経済研究所年報』第44号（中央大学経済研究所、2014年）、「本多利明の北方開発政策論—『蝦夷拾遺』を中心として—」笠谷和比古共著『徳川社会と日本の近代化』（思文閣出版、2015年）、「本多利明の蝦夷地開発政策論—天明～寛政期を中心として—」小室正紀共著『幕藩制転換期の経済思想』（慶應義塾大学出版会、2016年）。
- * 11 国立公文書館蔵『巡周蝦夷秘談』（請求番号：178-0253）。表紙の右隅に「蝦夷三話集」の墨字書きあり
- * 12 早稲田大学図書館蔵『俄羅斯紀聞 第2集第4冊』（請求記号：ル08 02994 0014）。なお、最上徳内・本多利明共著『赤蝦夷風説考』は最上徳内著・本多利明訂正『赤蝦夷風説考』〈工藤平助『加模西葛杜加国風説考』（別名『赤蝦夷風説考』）の部分書写に加筆したもの〉と最上徳内・本多利明共著『別本赤蝦夷風説考』を合わせたもの。
- * 13 北海道大学北方資料室蔵『千島秘説』（請求記号：旧記0416）。「田正圖」とは、確証はないが、北海道の間屋であり、諸資料の収集を行っていた田中正右衛門かもしれない。
- * 14 国立公文書館蔵『巡周蝦夷秘談』（請求番号：178-0253）。
- * 15 川上淳氏の「東蝦夷地は寛政11年（1799）から仮上知となり、エトロフ島などで実際に現地指揮を執ったのは近藤重蔵であったが、重蔵や幕府の蝦夷地政策・アイヌ政策に大きな影響を与えたのも、最上徳内である。重蔵の最初の蝦夷地調査の補佐役・先導役が徳内であり、身分や年齢の違いはあるが蝦夷地調査では先輩格であって、『蝦夷草紙』等から徳内が第一の蝦夷地通であることを見抜き、寛政10年（1798）の重蔵最初の蝦夷地調査では、他の者と人間関係がうまくいかないなかで、徳内に全幅の信頼を寄せ、エトロフ島に到達できた」（川上淳『近

世後期の奥蝦夷地史と日露関係』（北海道出版企画センター、2011年）、151頁）という指摘に顕著である。

- * 16 本論説においては、国立公文書館蔵『巡周蝦夷秘談』（請求番号：178-0253）を使用するが、同館では、外題である『蛮夷巡周蝦夷秘談』ではなく、『巡周蝦夷秘談』といったタイトルでもって情報公開を行っている（2017年10月31日現在）。なお、同館所蔵資料に基づいた翻刻が、山下恒夫氏により行われているところから（「本多利明宛最上徳内書簡」山下恒夫編『江戸漂流記総集別巻 大黒屋光太夫史料集 第1巻』（日本評論社、2003年）519～533頁）、資料引用については、今後の研究上の利便性をはかるために、山下研究の掲載頁を「『史料集』、～頁」として略記する。なお、国立公文書館本との照合を経たうえで適宜修正を施すこととする。
- * 17 『乍恐以書付奉申上候』の成立年月日や、それと利明が接触した時期の特定化については、同資料の冒頭部に限らず、全体からその証明となる引用を行った。
- * 18 『史料集』、526頁。
- * 19 『史料集』、527～528頁。
- * 20 コラー・スサンネ「天明年間の幕府による千島探検」『北海道・東北史研究』第2号（北海道・東北史研究会、2005年）、7頁。
- * 21 『史料集』、522頁。
- * 22 『別本赤蝦夷風説考』は本多利明と最上徳内の共著として理解しうる資料であり、〈1〉と〈2〉を併せて参考とした形跡がある。その詳細については、今後の課題として、他稿に譲ることとする。
- * 23 国立公文書館蔵『別本赤蝦夷風説考』（請求番号：185-0289）。本引用の「二」千七百八十六は「一」千七百八十六の誤記であると推定される。なお、内容面からすれば、同書は〈1〉『乍恐以書付奉申上候』のみならず、〈2〉『乍恐愚案奉申上候』のほとんどを使用しながら成立していると断言できる。
- * 24 徳内から利明への伝達の経緯については、直接・間接、あるいは、原本・写本（控えなど）など、幾つかの仮説を立てることができるが、現段階においてそれを明らかにすることはできなかった。なお、この算盤の話は、利明や徳内と同時代人である蔵書家小山田与清（1783-1847）も知るところであり、鈴木久男氏は、小山田が著すところの『松屋筆記』巻76に徳内が天明5年に西洋人から算盤を見せてもらった話を徳内自身から聞いたという内容が記されていると指摘している（同「ロシア算盤起源考（3）」『国士館大学政経論争』第52号（国士館大学政経学会、1985年）、83頁）。
- * 25 「序文」については『史料集』において未翻刻であることから、以下に全文を翻刻しておく（なお、利便性を図るために句読点を施した）。
「巡周蝦夷秘談 寛政元年の秋蝦夷騒擾の風説あり。伝聞く処を集て書記すに、此章は奥南部の藩人坎夷地巡周の官たる也。近夷を巡行せしと見へし。彼地より故郷の師の許へ送りたる文章と見ゆ。若くは末の記に有処の箱民島田の両子は則巡周の官にて、勤而令運回の人與。旧年午より今酉に到て四年を経たる事と見へたり。旅用衣食居も如何成事也。雖貯金銀、其国其地に不応は殆不通の事なるべし。食も言語も吾国と違へは定て不通用ならんと智勇の人と見へん。自然の応対豈賞せざらん哉。三四年も経安く必用の貯も能く届たる事哉。官役の大船なりてはかかる巡行は成かたからんと覚ゆ。此主意を伝写する事左の如し。所持の他人見を恐れて名目を露はさず。仍而秘談たるべしと尔いふ。」（国立公文書館蔵『巡周蝦夷秘談』（請求番号：178-0253）・『史料集』未翻刻）。なお、「寛政元年の秋蝦夷騒擾の風説」、すなわち、寛政1年（1789）のクナシリ・メナシアイヌの戦いについての関心から『巡周蝦夷秘談』の編さんが企図されたことがわかる。また、文中の「箱民島田の両子」は『蝦夷千嶋話』の文中の記載「箱民安右衛門」・「嶋田弥市」を指している。
- * 26 『史料集』、521～522頁。なお、「此書状に午の三月と有之は天明六年午の年にて御座候」は〈2〉の書状全体を

直接指している。

- * 27 前掲塚谷 (1970)、450 頁。なお、塚谷氏と同様の見解を阿部真琴氏も「北方問題への関心のやや確かなしるしを、北夷という号にとるとすれば、それは利明訂・永井正峯『天元大意隠題解』(1782)や『答于鈴木氏算題』・『再訂三条図解』(ともに 1784)などでみられる。(中略)北夷の号から、北方問題への利明の関心は 80 年代に証明されるとしても、当初は平助(工藤平助)の後塵たるをまぬかれず、子平(林子平)の先覚ともいえないのではないか」〈阿部真琴「本田利明の伝記的研究(2)」『ヒストリア』第 12 号(大阪歴史学会、1955 年)、88 頁〉と指摘している。
- * 28 『本多利明先生行状記』は、文中に「今年七十有三歳」とあるところから、利明の生年を寛保 3 年(1743)とすれば、文化 13 年(1816)に成立したものと推定される。
- * 29 宇野保定述『本多利明先生行状記』『本多利明集』(誠文堂新光社、1935 年)、403 頁。以下、『本多利明集』に所収された翻刻からの引用については「『集』、～頁」と略記する。なお、東北大学附属図書館狩野文庫蔵(宇野保定著・河野通義写(文政 9 年 9 月 6 日写))『本多利明先生行状記』(請求記号: 3-6875-1)を適宜参照した。
- * 30 宇野保定述『本多利明先生行状記』『集』、403 頁。
- * 31 宇野保定述『本多利明先生行状記』『集』、402 頁。
- * 32 『巡周蝦夷秘談』については、『^マ夷^マ周^マ覧^マ蝦夷秘談』には徳内が利明にあてたといわれる手紙(1787 年はじめ)が収められ「前掲阿部(1955)、89 頁」・「徳内は班の先陣役として単独に発足し、3 月のうちにアツケンから流水のなかをクナジリ、エトロフに渡った。これらの行程について、徳内は逐一利明に報告している。徳内の手紙を集めたという『蝦夷秘談』、同じ内容の『天明六丙午蝦夷地見聞記』(筆写注: 最上徳内・本多利明共筆『別本赤蝦夷風説考』と同内容)は利明の名で編集され、徳内の『蝦夷草紙』(1790)とともに詳細な旅行報告となっている」〈阿部真琴「本田利明の伝記的研究(3)」『ヒストリア』第 13 号(大阪歴史学会、1955 年)、101 頁〉という阿部真琴氏の紹介、最上徳内の「著書および作製地図目録」に「『巡周蝦夷秘談』(未完)」と整理した島谷良吉氏の紹介〈島谷良吉「最上徳内」(吉川弘文館、1995 年)、298 頁〉があり、同書を研究論説の中で扱ったものとしては、大友喜作氏の「『巡周蝦夷秘談』なる一写本があり、その中に徳内がエトロフから発したといふ左記一節(筆者注一『乍恐以書付奉申上候』の部分引用)を含む書状を載せてある」〈大友喜作「解説」『北門叢書第 3 冊』(北光書房、1944 年)、87 頁)や、『巡周蝦夷秘談』や『乍恐以書付奉申上候』といったタイトルは記されていないものの、ここからの引用文や現代語訳を活用しながらの論旨展開が認められる皆川新作氏の成果〈皆川新作「北辺の先覚者 最上徳内」(電通出版部、1943 年)43～55 頁〉がある。管見の限りではあるが、『乍恐以書付奉申上候』の内容を真正面から分析したものは皆川研究のみであるといえる。ただし、これら先学の成果は本多利明への思想的影響を問うていない。
- * 33 〈2)『乍恐愚案奉申上候』については、紙幅の都合上、他稿において細微な分析を行うこととする。
- * 34 菊池勇夫『幕藩体制と蝦夷地』(雄山閣、1984 年)、96 頁。
- * 35 岩下哲典氏は「寛政期(1789～1800)には、ベニョフスキー情報などの「海外情報・知識」を入手・分析して現在の政治状況の変革までを提言する『海国兵談』が著された。しかし、幕府は著者林子平に対して、版木の没収と禁固という断固たる措置をとったのである。このことによって、海外知識とそれに裏づけられた定見を公表することは、幕府の忌むところであることがはっきりし、「情報」を入手し、分析することができる識者も自ら規制をせざるを得なくなった」〈岩下哲典『江戸情報論』(北樹出版、2000 年)、59 頁〉と指摘している。なお、本多利明の著作には、カラフト島とサカリイン島をそれぞれ別個の島とした記述がみられるが(本来は同一の島)、もしかすると、林子平著『三国通覧図説』および付図 5 葉〈天明 6 年(1786)成立〉の影響下にあるのか

もしれない。この問題については今後の課題としたい。

- * 36 水口志計夫「ベニョフスキーについて」水口志計夫・沼田次郎編訳『東洋文庫 160 ベニョフスキー航海記』（平凡社、1970年）、3頁。
- * 37 秋月・岩下氏の成果も含めた近年の北方エリア史研究の代表的な成果としては、ズメナンスキー研究〈S. ズメナンスキー著／秋月俊幸訳『ロシア人の日本発見—北太平洋における航海と地図の歴史—』（北海道大学図書刊行会、1979年）〉、菊池勇夫研究〈同『幕藩体制と蝦夷地』（雄山閣、1984年）・同「海防と北方問題」『岩波講座 日本通史 14 近世 4』（岩波書店、1995年）〉、秋月俊幸研究〈同「千島列島の領有と経営」『岩波講座 近代日本の植民地 1 植民地帝国日本』（岩波書店、1992年）・同「千島列島をめぐる日本とロシア」（北海道大学出版会、2014年）〉、岩崎奈緒子研究〈同『日本近世のアイヌ社会』（校倉書房、1998年）〉、浅倉有子研究〈同『北方史と近世社会』（清文堂、1999年）〉、児島恭子研究〈同『アイヌ民族史の研究—蝦夷・アイヌ観の歴史的変遷—』（吉川弘文館、2003年）〉、コラー・スサネ研究〈同「安永年間のロシア人蝦夷地渡来の歴史的背景」『スラヴ研究』第51号（北海道大学スラヴ研究センター、2004年）・同「天明年間の幕府による千島探検」『北海道・東北史研究』第2号（北海道・東北史研究会、2005年）〉、川上淳研究〈同「近世後期の奥蝦夷地史と日露関係」（北海道出版企画センター、2011年）〉、藤田覚研究〈同『近世後期政治史と対外関係』（東京大学出版会、2005年）〉、岩下哲典研究〈同「一八世紀～一九世紀初頭における露・英の接近と近世日本の変容」笠谷和比古編『一八世紀の日本の文化状況と国際環境』（思文閣、2011年）〉、が列举される。
- * 38 岩下哲典「一八世紀～一九世紀初頭における露・英の接近と近世日本の変容」笠谷和比古編『一八世紀日本の文化状況と国際環境』（思文閣、2011年）、513～516頁。なお、黒岩幸子氏は、「先住民を除いて、初めて千島に到達したのは、1643（寛永20）年に日本北方海域調査に訪れたフリーズ（Vries, Maerten Gerritsz, ?-1647）」〈黒岩幸子「千島列島における第一のトボスの盛衰について—「北方領土」と千島—」岩手県立大学総合政策学会『総合政策』第6巻第1号（2004年）、32頁〉と指摘している。また、ペーリングの第二次探検（1733～1743）は海峡問題の決着だけでなく、北方の総合学術調査を目的とする前例のない大規模なものとなり、大北方探検と呼ばれた〈森永貴子『ロシアの拡大と毛皮交易—16～19世紀シベリア・北太平洋の商人世界』（彩流社、2008年）、81頁〉。
- * 39 木村和男『北太平洋の「発見」—毛皮交易とアメリカ太平洋岸の分割—』（山川出版社、2007年）、7頁。なお、宮崎正勝氏も「ペーリングの航海は、ペーリング海が「ラッコの海」であることを明らかにした。それが、金鉱の開発を目指す「ゴールド・ラッシュ」ならぬ、「柔らかな黄金」と呼ばれたラッコの狩猟ラッシュにつながった」（宮崎正勝「オホーツク交流圏の史的形成過程—ロシアの進出後のオホーツク交流圏と日本—」北海道教育大学へき地教育研究施設『へき地教育研究』第57号（2002年）、158頁）と同様の見解を示している。
- * 40 秋月俊幸『千島列島をめぐる日本とロシア』（北海道大学出版界、2014年）、65頁。岩下哲典氏は、「千島では宝暦10年（1760）、カムチャッカから徴税人が派遣され、明和3～6年（1766～69）にはコサック隊長が、ウルップ島およびエトロフ島のアイヌ民族から徴税を行ったことが確認できる」（前掲岩下（2011）、514頁）と指摘している。
- * 41 B.L. ウォーカー著、秋月俊幸訳『蝦夷地の征服 1590-1800—日本の領土拡張にみる生態学と文化—』（北海道大学出版会、2007年）、198頁。具体的には、「アイヌたちはウルップ島での交易でロシアの商品を入手し、それらを飛弾屋の支配下にあったノツカマップの会所に持参した」（同書、215頁）とされる。
- * 42 前掲岩下（2011）、514頁。なお、この事件について、幕吏佐藤玄六郎がアイヌから取材（佐藤玄六郎編『蝦夷拾遺』）しているが、それによると、ウルップ島におけるロシア人とアイヌの対立から、双方死者を出している（前

掲 B.L. ウォーカー (2007)、205～206 頁)。

- * 43 田沼意次の老中在任期間は安永元年 (1772) 1 月 15 日～天明 6 年 (1786) 8 月 27 日である。
- * 44 前掲岩下 (2011)、514 頁。なお、「アンチーピンの出資者シェリホフは、アリューシャン列島や北米の毛皮事業に精力を注ぎ、また他の出資者ラストチキン、ウルップに進出、ネモロで松前藩士と接触もし、1779 年にはアツケシに渡来している」(同書、514 頁)とロシア側の積極的な姿勢が明らかとなっており、「北太平洋の毛皮事業はゴリコフ・シェリホフ会社、ヤクーツク商人レベジェフ＝ラストチキン、イルクーツク商人キセリョフの三勢力に再編された」(前掲森永 (2008 年)、94 頁) 影響下に、協業を意識しながらの企業間競争の側面がある。
- * 45 前掲秋月 (2014)、69～70 頁。
- * 46 前掲岩下 (2011)、515～516 頁。
- * 47 前掲秋月 (2014)、74 頁。
- * 48 工藤平助は『赤蝦夷風説考』において、ロシア人の南下と蝦夷地辺境における日本人との密貿易の噂を述べ、蝦夷地金山の開発とロシア貿易官営の利益を強調している(秋月俊幸『日露関係とサハリン島－幕末明治初年の領土問題－』(筑摩書房、1994 年)、37 頁)。なお、従来、「赤蝦夷風説考」というタイトルが一般化していたが、岩崎奈緒子研究(同『「赤蝦夷風説考」再考』『北海道・東北史研究』第 3 号(北海道・東北史研究会、2006 年))により、「加模西葛杜加国風説考」という呼称が定着しつつある。なお、同氏による資料『加模西葛杜加国風説考』の翻刻版が同会誌の同号に掲載されている。
- * 49 前掲秋月 (2014)、82 頁。
- * 50 前掲菊池 (1984)、17 頁。
- * 51 国立公文書館蔵『本田氏策論 蝦夷拾遺』(請求記号:178-0399)。本多利明「本多氏策論 蝦夷拾遺」『集』、296～297 頁。なお、同館所蔵資料は「本多氏」ではなく、「本田氏」と記されている。
- * 52 藤田覚『近世後期政治史と対外関係』(東京大学出版会、2005 年)、192 頁。
- * 53 [図 A: 北海道・クナシリ島・エトロフ島地図] ならびに [図 B: クナシリ島・エトロフ島地図] とともに、北海道立図書館蔵『蝦夷草紙附図』(管理番号:2297)をベースとして、これを翻刻したとみられる皆川新作氏作成の地図(前掲皆川 (1943)、36,47,57 頁所収)を参照しながら作成した。なお、地名の表記などについては、平山裕人氏の労作(同『アイヌ地域史資料集』(明石書店、2016 年)、167～173 頁)をおおいに参考とした。なお、『蝦夷草紙附図』は写本であるが、最上徳内と同道の幕吏の作成した報告書『蝦夷草紙』の附図であることから、天明 5・6 年 (1785・86) 段階において、徳内が把握したであろうイメージに最も近いと考えられる。
- * 54 『蝦夷廻見日記』は、東蝦夷地調査班の山口に帯同したアイヌ語通詞飯田林右衛門の同行日誌であり、行程に関する詳細が日々記されている。同資料についての分析に基づきながら北方史の展開を再構成した先行研究は、北海道大学附属図書館北方資料室蔵版(請求記号:旧記 0866(北大北方資料室))を使用したカラー・スサンネ研究(前掲カラー・スサンネ (2005))と秋月俊幸研究(前掲秋月 (2014))を列挙することができ、これら労作は筆者にとって、最先端の研究水準に相当する。なお、同資料は高知県立高知城歴史博物館土佐山内家宝物資料館にも所蔵(所蔵者函架番号:ヤ 291-81)されており、筆者はこの資料を適宜参照した。
- * 55 前掲秋月 (2014)、ならびに前掲カラー・スサンネ (2005 年)が最新の重要研究に該当する。
- * 56 国立公文書館蔵『蝦夷地一件』(請求番号:178-0184)。『蝦夷地一件』『新北海道史』第 7 巻史料 1(北海道、1969 年)、319 頁(以下、再出につき、「『道史』、～頁」と略記する)。
- * 57 国立公文書館蔵『蝦夷地一件』(請求番号:178-0184)。『道史』、360 頁。
- * 58 国立公文書館蔵『蝦夷地一件』(請求番号:178-0184)。『道史』、360 頁。

- * 59 前掲秋月（2014）、84～93頁。前掲カラー・スサンネ（2005）、4～5頁より。なお、黒岩幸子氏は「天明6年（1786）、調査隊の竿取（測量役）最上徳内は、和人では初めてエトロフ、ウルップに渡る。徳内を案内したのは、アツケシの有力アイヌ、イコトイである」〈黒岩幸子「千島列島における第一のトボスの盛衰について―「北方領土」と千島―」岩手県立大学総合政策学会『総合政策』第6巻第1号（2004年）、44頁〉と指摘している。
- * 60 クナシリ島の運上屋の場所であるが、佐藤玄六郎など幕吏たちが作成した報告書「蝦夷拾遺」に「クナジリキイタツフより海行七里余丑寅にあり。周囲一百里余、ヲトシルベと云所に運上屋一戸あり」〈大友喜作校訂『北門叢書 第1冊』（北光書房、1943年）、263頁〉と記録されているところから、「ヲトシルベ」の可能性が高い。
- * 61 前掲カラー・スサンネ（2005）、4～5頁。
- * 62 前掲秋月（2014）、95頁。
- * 63 前掲秋月（2014）、91～97頁。
- * 64 前掲秋月（2014）、96～97頁。
- * 65 国立公文書館蔵『蝦夷地一件』（請求番号：178-0184）。『道史』、405～406頁。
- * 66 国立公文書館蔵『蝦夷地一件』（請求番号：178-0184）。『道史』、394頁。
- * 67 前掲皆川（1943）、64～65頁。
- * 68 “御試交易”は、北方情報を幕府が直接に入手する新たなルートの設定を意味した。幕府自身によるルートは、その後クナシリ・メナシの戦い以降も北方情報の入手ルートとして機能し続けることになった〈浅倉有子『北方史と近世社会』（清文堂、1999年）、71頁〉という指摘がある。
- * 69 前掲皆川（1943）、64頁。
- * 70 前掲森永（2008）、23頁。徳内が蝦夷地に滞在していた下限については現在のところ不明瞭であるが、皆川新作氏は「俊蔵と徳内が天明7年2月にはまだ松前にゐたことは「引渡申談書」によって明らかであり、おそくとも3月中に帰府したことは家大人小傳に「明年丁未春江戸ニ反ル」とあるによって知られる」〈前掲皆川（1943）、68頁〉と指摘している。なお、幕吏たちのその後であるが、山口・佐藤・皆川は「勝手帰村」と解任され、青島は降格〈前掲皆川（1943）65～68頁〉、とそれぞれが政局の余波を受けている。
- * 71 前掲川上（2011）、162頁。なお、蝦夷地調査の報告書は皆川・佐藤・庵原・山口・青島により『蝦夷拾遺』として整理されており、後世に写本として流布した形跡が認められる。同書については大友喜作『北門叢書 第1冊』（北光書房、1943年）に翻刻化されている。
- * 72 秋月俊幸「千島列島の領有と経営」『岩波講座 近代日本と植民地 1 植民地帝国日本』（岩波書店、1992年）、122頁。『蝦夷風俗人情乃沙汰図』は本多利明が「序」を寄せた最上徳内著『蝦夷風俗人情乃沙汰』の附図を指す。
- * 73 前掲島谷（1995）、276頁。
- * 74 「『蝦夷草紙』は大友喜作著『北門叢書 第1冊』（北光書房、1943年）・吉田常吉編『蝦夷草紙』（時事通信社、1965年）に翻刻化されている。
- * 75 『蝦夷国風俗人情之沙汰』は『日本庶民生活史料集成 第4巻 探検・紀行・地誌（北辺篇）』（三一書房、1969年）に翻刻化されている。
- * 76 『蝦夷草紙後篇』は大友喜作著『北門叢書 第3冊』（北光書房、1944年）・吉田常吉編『蝦夷草紙』（時事通信社、1965年）に翻刻化されている。
- * 77 資料『蝦夷地一件』の内容として、普請役の給金について触れた部分に「竿取小者給金並道中駄賃」〈国立公文書館蔵『蝦夷地一件』（請求番号：178-0184）。『道史』、411頁〉・「竿取小者等給金も通例にては罷越候もの無御座」〈同。同、412頁〉と「竿取」である最上徳内への手当て分に関する記録がみられることを補足しておく。

- * 78 皆川新作氏の論説「天明六年徳内の千嶋探検」〈前掲皆川（1943）、43～68頁所収〉は、どうやら、「乍恐以書付奉申上候」を参照しながら執筆されたと思われるが、ほぼ現代語訳されているため、本論説では逐一、資料引用を行いながらの再検討が進められる。
- * 79 『史料集』、519～520頁。
- * 80 "ナイホ"という地名はエトロフ島に複数存在しており、B②・B⑥はそれぞれ別の場所である。
- * 81 『自然治道之弁』の内容についての簡潔な解説は、前掲宮田（2016）、306～307頁を参照されたい。
- * 82 『自然治道之弁』30丁裏～31丁表・『集』未翻刻。
- * 83 『自然治道之弁』の内容についての簡潔な解説は、前掲宮田（2016）、306～307頁による。
- * 84 『自然治道之弁』31丁裏～32丁表・『集』263頁。
- * 85 本稿は〈1〉『乍恐以書付奉申上候』の冒頭部の使用に力点を置いたものであるが、それ以外の部分についても、当然のことながら細微な分析を行わなければならない。また、それだけでなく、同資料に続く体裁により所収・編さんされた別の書簡〈2〉『乍恐愚案奉申上候』についても同様である。以上を踏まえながらのこれら資料の史的意義を利明一徳内との関連下に位置づけることを今後の課題としたい。